

(報告)「持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けて日本の学術界が果たすべき役割」

1 現状及び問題点

日本学術会議では、持続可能な社会の形成のために学術が果たすべき役割について様々な提言、報告を行ってきたが、持続可能な開発と科学技術の問題、社会問題はそれぞれ個別の問題として分析され、解決策が考えられてきた。一方、SDGsの目標達成と個別の課題の解決には相互に複雑な関係があり、多くの学術領域の共働と社会との強い連携が不可欠であることから、SDGsの策組みの中で従来の学術と社会的課題を捉えなおし、問題解決の策を提示する必要がある。

2 報告の内容

(1) 持続可能な開発目標(SDGs)とは何か

SDGsは、環境と開発の調和を主な課題としてきた「持続可能な開発」と、開発途上国の経済・社会開発を主な課題としてきた「ミレニアム開発目標(MDGs)」の2つの潮流を背景に持ち、その策定過程には、科学者を含む多様なステークホルダーが参加した。17目標と169のターゲットについて、指標によって各主体の進捗を測るメカニズムを持つ。相互に影響する複雑な目標の包括的、統合的な実施には、分析や制度設計における科学的知見が不可欠であり、学術界からの大きな貢献が期待される。

(2) 国内外におけるSDGsの展開動向と学術界の取り組み

SDGsの特徴の一つとして包摂性があり、国家や企業、市民社会など多様なステークホルダーがそれぞれの立場で目標実現に向けたプロセスを示し、異なるステークホルダーが連携している。

この中で、学術界の重要な役割は、SDGsの掲げる高い目標に対して科学的な根拠を与えることである。困難な到達目標を実現可能なビジョンとして示すとともに、そこに到達するための科学技術イノベーションや社会イノベーションのあり方について、具体的に提示することが求められている。

また、目標やターゲット間の相互関連性を、各ステークホルダーの役割に留意しながら体系化し、より高次の目標群やターゲット群へとまとめていくための指針を示すとともに、科学的な知見を分かりやすく社会に普及させ、学術と社会の対話が可能となるような方策を求めていくことも重要である。この点で、科学コミュニケーションを重視し、それを担う人材を育成することが急務である。

(3) 超学際研究教育の推進がSDGsの実現に果たす役割

わが国においてこれまで進められてきたサステナビリティ学や Future Earth とい

った超学際研究は、①国際ネットワークを通じた SDGs 達成への国際貢献、②主にアジア・太平洋地域における SDGs 達成に向けた学術面からの支援、③日本における多様なステークホルダーとの協働を通しての SDGs の達成に貢献する役割を担う。また、日本の学術界は、企業や NPO/NGO の活動を学術面から支援する役割が期待されている。超学際研究の推進には幅広い地球規模課題に関するリテラシーが求められることから、持続可能な開発のための教育（ESD）では、これまで以上に積極的に、健全な「市民」のマインドを持った「専門家」の養成を行うことが求められる。

(4) SDGs 達成のためのエンジンとしての科学技術イノベーション

SDGs は、相互に関連する 17 の目標を統合的に達成しようとしているが、そのためには科学技術イノベーションの役割が大きい。ここでは、具体的な課題解決策を見いだすことはもとより、目標達成に向けた合理性のある政策の立案、推進、進捗評価のためのエビデンスの提供という観点からも大きな期待が寄せられている。そのために分野横断研究の取り組みが強化されつつあるが、さらに、共創的科学技術イノベーションを推進するため資金メカニズムの改革が求められている。

(5) 日本学術会議の役割

SDGs の主流化に向けた学術界の役割は大きい。日本学術会議では、自然科学と人文社会科学にまたがる俯瞰的、包摂的な立場から検討を行い、とくに科学と社会の協創が強く求められる SDGs に対して、経済・社会・環境の 3 側面を統合した貢献を目指す必要がある。